

セシウム・スギ花粉が関東地方を襲う。
来年2月上旬から飛び始める可能性。

http://blog.livedoor.jp/the_radical_right/archives/52793335.html

スギ花粉 セシウム調査

林野庁 福島東部、来月から

スギ花粉の季節を前に林野庁は11月から、東京電力福島第一原子力発電所に近い福島県浜通りのスギ林を中心に、スギ花粉に放射性セシウムがどれだけ含まれるかの調査に乗り出す。12月には中間報告を公表する予定。スギ花粉の汚染については懸念する声もあるが、飛散しても体内に取り込ま

れるのは微量とみられ、専門家は一貫して「心配ない」と指摘している。調査は、スギの生葉に含まれた放射性セシウムの最高値は1キログラムあたり17万7600ベクレル。だが「葉から花粉にどの程度移行するかは、まったく予測ができません」と、林野庁の調査員は言う。専門家の間でも、意見はまちまちだ。日本原子力研究開発機構の吉田善行客員研究員（放射化学）は「花粉にはいろいろな特性がある。飛び始めまでにしっかりと調査をすることが前提」とした上で、常緑樹のモミの木は調査では、古葉から新しい葉に移行しなかったと指摘。「現時点では、葉から花粉に移行するとは考えにくい」と語る。一方、首都大学東京大学の福士政広教授（放射線安全管理学）は埼玉県の狭山茶などから基準値（1キログラムあたり500ベクレル）を超える放射性セシウムが検出された例から「一定の量が葉から花粉に移行する可能性はあるだろう」とみる。スギ花粉は例年、関東地

方に、飛び始めまでにしっかりと調査をすることが前提」とした上で、常緑樹のモミの木は調査では、古葉から新しい葉に移行しなかったと指摘。「現時点では、葉から花粉に移行するとは考えにくい」と語る。一方、首都大学東京大学の福士政広教授（放射線安全管理学）は埼玉県の狭山茶などから基準値（1キログラムあたり500ベクレル）を超える放射性セシウムが検出された例から「一定の量が葉から花粉に移行する可能性はあるだろう」とみる。スギ花粉は例年、関東地

方では2月上旬から飛び始める。気象情報会社「ウエザーニューズ」の予測では、来春の飛散量は全国的に今年より7割減の見込み。林野庁によると、福島県

内スギ林は約18万5千ヘクタールで、花粉の飛散距離は風速や風向によって数百メートル以上、関東地方に到達する可能性もあるという。ただ、福士教授は「過度に心配する必要はない。放射性セシウムを含んだ花粉が飛んでも体内に取り込む量はごく微量。心配であれば、マスクやゴーグルを着用するなど通常の花粉対策で十分防げる」としている。

5面

これは23年10月31日の産経新聞の第一面に掲載された記事です。山には平地よりも多くの放射性物質・セシウムを含む雨が舞い降りていることは、文部科学省が23年10月18日に公表したHPサイトでも明らかとなりました。これまで人間が住んでいる所の放射性セシウム濃度しか公表されてこなかったため、ややもすればそれ以外は問題ないなどの錯覚に陥っていた可能性もありました。

しかし、この表示のようにセシウムは山林地帯の広範囲に及んでいることが明確になったわけです。そこで懸念されるのがこの山に降ったセシウムの行方なのですが、河川に流れたり風に乗って住宅地に降りてきた、風向きによっては異常に高いホットスポットを生み出しています。

この産経の記事によれば「文部科学省が6月に行った調査では、スギの生葉に含まれた放射性セシウムの最高値は1キログラムあたり17万7600ベクレル」と信じられない高濃度なものとなっています。ご存知のように口にする野菜や果実は1キログラムあたり500ベクレルを越えれば出荷停止となっています。

これだけ高濃度な放射性セシウムを含むスギが、11月から内部で花粉を作り始め成長します。現在花粉にセシウムがどの程度移行するのか？は調査の段階で軽々しくは断定出来ません。しかし、その恐れがあるということで調査が開始されました。

従来より詳細な線量地図

放射線量などが詳細な地図で確認できる
文科省のホームページの画面

放射線量の分布を、従来より詳細な地図で確認できるホームページを開発した。市町村別の大まかな傾向ではなく、地区ごとの違いを知りたいとの住民の要望に応えた。

すでに公表している土壌分析や航空機測定の実データを利用。東北や首都圏の各県で、地図をズームアップしながら表示できる。

ホームページのアドレスは
<http://ammap.isc.ae.go.jp/>

映像を同時に見ることで数値の高い場所を確認できるほか、想定より線量が高い場合は対策本部から車に乗った人に避難指示を出すこともできる。

時に、対策本部と現場の連携を高めるのに役立つと期待される。

従来のモニタリングカーは放射性物質の種類が即時分析はできず、現場の映像を送る機能も備えていなかった。新たなシステムは、ガンマ線の測定装置や衛星利用測位システム（GPS）、通信端末を装備。放射線量のデータとカメラの映像を同時に確認できる。

文科省ホームページ

文部科学省は18日、東京電力福島第一原発事故に伴う放射性セシウムの濃度や

東日本大震災
県内被害状況
(18日前8時現在)
(県など調べ)

死者	1846人
行方不明者	120人
重軽傷者	241人
避難者	4万9797人
住宅全壊	1万8137棟



上記記事は週刊文春 平成23年10月13日号



上記記事は週刊朝日 平成23年11月11日号